ISSN 2189-9290

The University of Aizu
Center for Cultural Research and Studies
Annual Review No.23, 2016

会津大学文化研究センター

研　究　年　報

第２３号

２０１６

会津大学

2017 年 3 月 発行

目　次

Page

巻頭言

文化研究センターの活動報告　菊地　則行　1

研究論文

・拡張型のトゥールミンモデル ―ライティングへの橋渡しの提案 ―　青木　滋之　5

・2016 年度会津大学新入生の生活と意識１　―基礎集計―　菊地　則行・中澤　謙　25

・2016 年度会津大学生の生活と意識１　―基礎集計―　中澤　謙・菊地　則行　53

研究・教育・活動報告

・青木　滋之　109
・苅間澤　勇人　110
・菊地　則行　111
・吉良　洋輔　112
・清野　正哉　113
・中澤　謙　114
・長谷川　弘一　115

巻頭言　2016年度文化研究センターの活動報告

文化研究センター長・菊地　則行

私の教養は「彼ら」の教養ではなかった

自分が重要だと考える教養を相対化する視点を持つことも教養の力として必要です。アメリカ大統領選挙で、私の教養は「私たち」（のため）の教養であり、トランプ候補を支持した「彼ら」（のため）の教養ではないことに気づいたからです。大統領選挙での気づきが教養を相対化する視点につながったのは、以下の理由からです。

つまり、差別発言をはじめ過激な言動、筋の通らない言動を繰り返すトランプ候補は大統領としてふさわしくないという考えは、民主主義社会では社会的「常識」であり、私を含めて多くの人たちから支持されている考えであり、そしてアメリカ国民の大多数の考えであると思っていたからです。トランプ候補を支持する考えは少数派のもので社会的「常識」ではないと思っていたからです。しかし、トランプ候補が大統領としてふさわしくないと考えるアメリカ国民と、ふさわしいと考えるアメリカ国民がほぼ同じ割合で存在していました。私や「私たち」とは違う考えを持つ「彼ら」が大統領選挙で勝利できるほどの人数・階層で存在していました。考えは教養の一部です。私や「私たち」の教養は、特別でも少数派でもない「彼ら」の教養ではありませんでした（100%違っているわけではありませんが）。このことに自覚が足りませんでした。

私の教養とはどのような人間・階層のための教養なのかを自覚することが必要です。とくに、自分の教養が「常識」であり多数派であるといつのまにか思い込んでいるときには注意が必要です。自らの教養を相対化し、互いの教養の違いを認めつつ交流・連携していく力は重要な教養です。

SGU、カリキュラム改革

学内では、文科省スーパーグローバル大学創成事業（SGU）の展開が本格的になっています。今年度の後期からはSGUの留学生が入学しました。英語による教養科目（経済学、会津の文化と歴史）を開講しました。来年度以降英語による教養科目を増やしていく予定です。

カリキュラム改革の一環として、２学期制の授業のほかに４学期制の授業が開講になりました。教養科目の人文・社会科目は４学期制、体育実技は２学期制にしました。教職科目は一部の科目以外は４学期制にしました。４学期制の授業の準備・実施、教育効果について検討が必要です。

また、2018年度のカリキュラムの全面改定に向けて学内作業が進んでいます。

教養教育の充実

2018年度のカリキュラム改革に歩調を合わせて、教養科目の見直しを行いました。これまでの「人文・社会」科目のカテゴリーを「人文・社会基礎」と「人文・社会概論」の２つの下位カテゴリーに分けました。前者の科目では、人文・社会の認識法とアカデミックスキルの教育を行います。後者の科目では、哲学・法学・社会学などの授業で、これまでの教養教育を継続します。

地域貢献・連携

地域貢献・連携のあり方の検討を開始しました。そのため、1998年から毎年開催していた文化研究セン

ター主催の公開講座を今年度は行いませんでした。

センター学習会

教養教育の充実のために、月一回のセンター学習会を定着させました。まず、教養科目構成を再編するための学習を行いました。具体的には、教養教育の目標についての学習、新教養科目に設置する授業「人文・社会の認識法１＆２」、「アカデミックスキル１＆２」の内容を作るための学習を行いました。また、現在行っている授業「文章表現法」の実践・テキストの検討も行いました。

教員人事

10 月に青木先生が准教授から上級准教授に昇任しました。これまでの教育・研究の実績や学内外での活動が高く評価されました。また、10 月から吉良洋輔先生が文化研究センターの教員に就任しました。ご専門は社会学です。優秀な若手として今後の活躍が期待されています。先生の就任の挨拶をご覧ください。

就任のご挨拶

吉良　洋輔

2016 年 10 月より会津大学の文化研究センターに着任しました吉良洋輔です。

6 年前に私は、先輩が只見町で行っていたフィールド調査についてきて、初めて会津を訪れました。その時､自然の豊かさと人の親切さに触れて､｢ここに住むことができれば幸せだろうな｣と思っていました。しかしまさか、将来本当に会津で住むことができるとは、夢にも思っていませんでした。

そしてもう一つ、当時は全く考えもしなかったことが、日本で最も先進的なコンセプトの大学が会津の地にあったということです。コンピューターと英語は、現代版の「読み書きそろばん」と言っても良いくらい、ほぼすべての産業で必要な技能です。そしてこれらを徹底して教える会津大学の教育の質は、(私の出身校も含め）日本の他大学の追随を許さない水準です。「会津から日本の大学教育を変える」というチャレンジに参加できることに、大変やりがいを感じています。

私の専門は、数理社会学と言って、社会学の伝統的なテーマに数学やコンピューターを使ってアプローチする分野です。私はその中でも、人間が互いに協力して自治を実現するメカニズムを研究しています。只見町のフィールド調査では、共有林の自治が成功している理由を聞き取りに行っていました。文系の中でコンピューターを使う研究をしているという点でも、会津大学に採用していただけたことは私にとって大変嬉しいことでした。

最後に、会津地域と会津大学の関係について、述べさせていただきたいと思います。会津大学が地域にできる最大の貢献は、何よりもまず、より良い教育を提供することだと思います。そして実際に、会津大学の卒業生が会津若松市でベンチャー起業をするなど、その成果が出始めていると聞いています。しかしこれからは、さらに戦略的に、卒業生が会津や福島に残って働くことができる、一度外に出てもまた戻りたくなる、というふうにする必要があるとも感じています。こうなれば、会津地域の発展に貢献するだけでなく、東京の殺人的な満員電車に乗らなくて済むという点で、卒業生にとっても良いことなのではないかと思います。具体的な方法はこれから考えることになりますが、まずは私が会津のことをよく知ろうと思っています。

微力ながら､今後の会津大学の教育と研究､そして会津地域の発展に貢献していきたいと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。